vol.23　ミクソリディアンスケールの使い方について　～その 2～

では、vol.23、始めていきましょう。

今回はミクソリディアン的なコード進行についてです。

これまでの様に、基本的なロジックは他のモードで解説したモノと同じですね。

一番細かく概要を解説しているのが、vol.12～14 辺りのリディアンの回なので、復習をする時は参考にしてください。

では、トニックは前回と同じく G に設定し、G ミクソリディアンで。

C キーのダイアトニックコードのⅤ 7 にあたる G7 を中心として、各コードを並べ直してみましょう。

※G ミクソリディアンのダイアトニックコード
Ⅰ、G7
Ⅱ、Am7
Ⅲ、Bm7(♭5)
Ⅳ、CM7
Ⅴ、Dm7
Ⅵ、Em7
♭Ⅶ、FM7

このコード群の内、G ミクソリディアンの特性音である F 音が入っているのは、
G7、Dm7、FM7 の 3 種ですね。(※Bm7(♭5)は除外)

その他のコードは、特に役割の無いものとなっています。

次に、上記のダイアトニックコード群をトライアドにした場合ですが、これも基本的な役割は同じで、G がトニックコード、Dm、F がミクソリディアンの特性音を含むコードになっています。

※G ミクソリディアンのダイアトニックコード
Ⅰ、G
Ⅱ、Am
Ⅲ、Bm(♭5)
Ⅳ、C
Ⅴ、Dm

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

Ⅵ、Em
♭Ⅶ、F

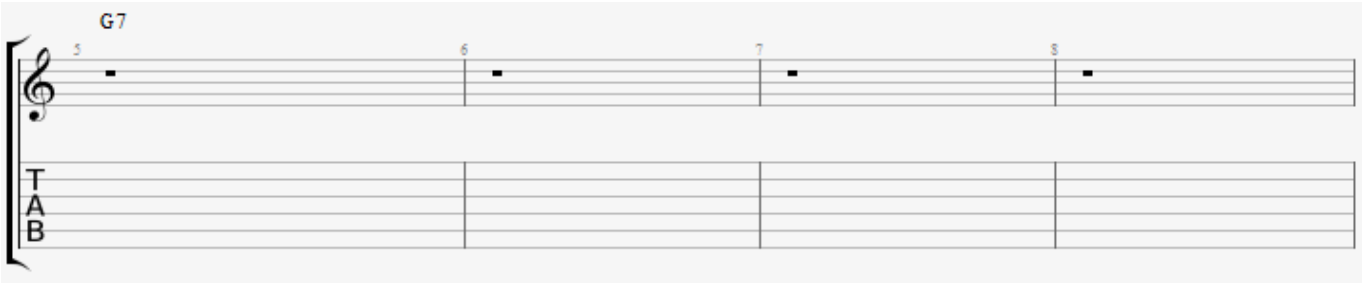
トライアドの場合、G からは m7th である F 音が抜けますが、このコードはそもそもがトニックなので、ミクソリディアンの中心として機能します。

ここで気を付けなければいけないのは、トニックコードである G7(G)が、C キーの場合のドミナント 7th になるので、Ⅴ－Ⅰ(G7→CM7)やⅡ－Ⅴ(Dm7→G7)と言った進行を作ってしまうと調性感が出てくる事ですね。

この辺りを避けながら、ミクソリディアン的な進行を作ってみましょう。

ではまず、最もシンプルなのがトニックコードのみの進行です。

譜例 1



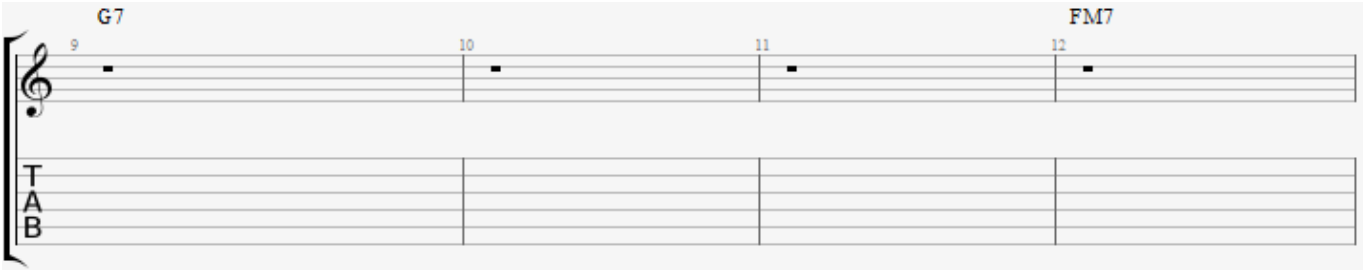
譜例では 4 和音(G7)にしてありますが、これはトライアド(G)でも構いません。

トライアドの方が響きとしてはスッキリしていて、そこに m7th を加えると少しブルージーな雰囲気が出てきます。

こう言った、Ⅰ 7 コードが長く続く進行としてはブルースが挙げられますが、ブルースのロジック(と言うか構造)は、厳密にはミクソリディアンとは違うものです。(※近しいと言えば近しいのですが)

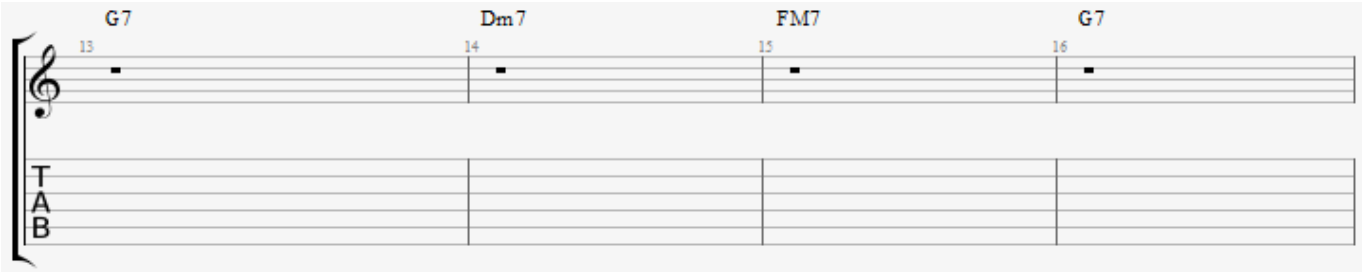
続けて他のパターンも見ていきましょう。

譜例 2



Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 3

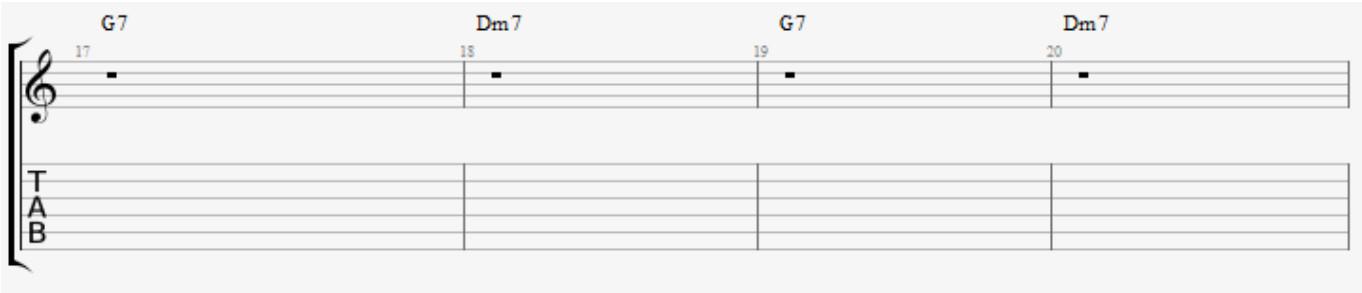


これらも、他のモードの時に同じ様な進行を作りましたね。

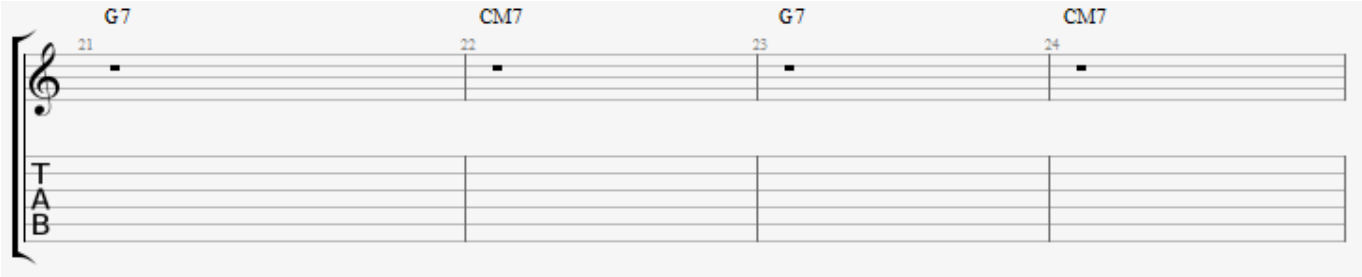
やはり重要になって来るのは、いかに調性や他のモードを示唆しないようにするか？です。

逆に、先ほども少しお話ししましたが、例えば以下の様にすると、ミクソリディアンからは離れていく事になります。

譜例 4、調性音楽のⅡ－Ⅴ的な流れの形成



譜例 5、調性音楽のⅤ－Ⅰ的な流れの形成



ミクソリディアン・モードを作りたい時に、こんな露骨な進行にはしないと思いますが、どちらも調性の 1 度(ここでは CM7)を中心に感じてしまう様な作りになっていますね。

これらを踏まえた上で、G ミクソリディアンのダイアトニックコードを、単純に使いやすい順に並べると以下のようになります。

1、G(tonic)、G7(tonic)
2、F(♭VII)、FM7(♭VIIM7)
3、Dm(Vm)、Dm7(Vm7)
4、Am(IIm)、Am7(IIm7)、Em(VIm)、Em7(VIm7)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

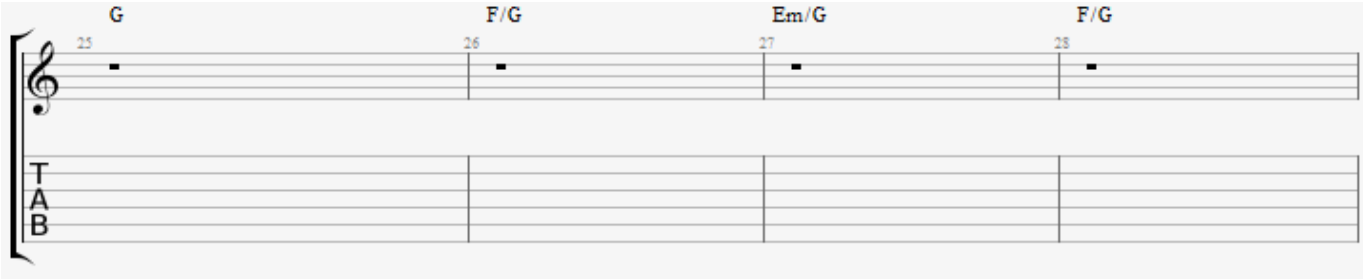
5、C(IV)、CM7(IVM7)

Dm(Vm)と C(VI)は、他の近い機能のコードに比べて順位を下げていますが、譜例 4、5 の様な使い方をしなければ普通に使えます。

では最後に、もう少しだけ進行を見て終わりにしましょうか。

これは他のモードでもやった、トニック・ペダル的なヴォイシングを使った進行ですね。

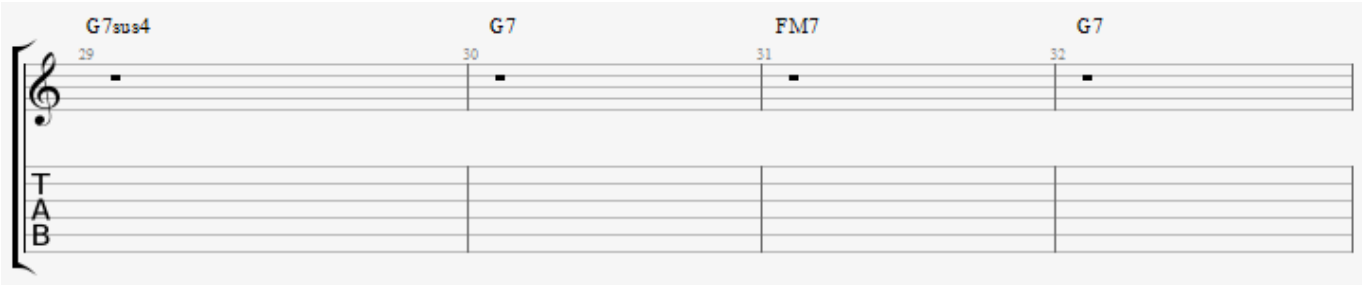
譜例 6



この様にするとトニックへの帰結感が強まります。

次に、前回も少し出てきましたが、sus4 系のコードを使うことも出来ます。
(※譜例 6 の F/G も Gsus4 に近いですが)

譜例 7



なお、全ての譜例に言える事ですが、4 和音をトライアドに変えた場合、また響きが変わりますのでそちらも試してみましょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved